慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	創造的ディジタルメディアの基礎と応用に関する研究：「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」理論編グループ：アート・ドキュメンテーション論の基礎より(平成11年度科学研究費補助金(COE形成基礎研究費)研究報告書,アート・アーカイヴズ/ドキュメンテーション：アート資料の宇宙)
Sub Title	
Author	
Publisher	
Publication year	2001
Jtitle	Booklet Vol.7, (2001.) ,p.81- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000007-04394221

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成１１年度科学研究費補助金（COE 形成基礎研究費）研究報告書

創造的ディジタルメディアの基礎と応用に関する研究

「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」理論編グループ：アート・ドキュメンテーション論の基礎[★1]より

1．はじめに

「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」プロジェクトにおいては、「アーカイヴ」を画稿・草稿や書簡、画像、研究文献等の特定の研究対象の「記録類（records)」を収集し、整理・体系化等の記録類相互の秩序付けを行い、研究や利用に便利な形式で提供し、保存・管理する機関として捉えている。このような「アーカイヴ」で行われる、記録化された資料の管理活動一般を「ドキュメンテーション（documentation)」という。要するに、「アート・アーカイヴ」は「アート・ドキュメンテーション」の活動拠点といえる。

一般に「ドキュメンテーション」とは文献情報の効率的流通を図る技術の総体として捉えらている[★2]。ドキュメンテーションの概念そのものは、20世紀の初頭にヨーロッパ文化とその豊かな教養に裏打ちされた、オトレ（Paul Otlet）とラフォンテーヌ（Henri Lafontaine）らによって確立された活動であり、その活動は社会の進化発展のために知識の総合化を果たす書誌的な活動を意味している。従って、アート・ドキュメンテーションとは知識の主題分野がアートの分野であり、書誌活動の対象となる文献がアートに関する文献であって、それらの資料・記録類を用いてアートに関する知識の総合化を果たす活動である。

そこで本稿ではアート・アーカイヴの活動の実態であるアート・ドキュメンテーションを理論的に解明するため、前年度の報告[★3]に引き続き、主要で基本的な問題点を指摘する。

2．アート・ドキュメンテーションのパラダイム

前年度の報告書に示した「アート・ドキュメンテーションに関する諸見解」[★4]によれば、日本における既存のアート・ドキュメンテーション研究のリーダーたちの 諸見解は不適切もしくは不十分であるとして、アートの研究や対象の更なる拡大や再検討の必要性が述べられている。このようにアート・ドキュメンテーションの対象となる資料や文献の種類、さらには情報内容等を拡大することは、それらの資料類の持つ特性に応じて、資料利用の観点からの資料相互間の秩序付けに強く影響する。更に資料の秩序付けの再検討は、アート・ドキュメンテーション組織や機関の運営のあり方にも影響を及ぼす。

本プロジェクトが「アートの“アーカイヴ”という文化的装置について、

その人文的側面とそれを越える新しいディジタル・メディアとの関係付けや、未来を指向する新しい様態や形式を創出する」ことを目指す以上、アートの全分野を視野に入れ、古くからの伝統的メディアから現代の最新の情報メディアまでを対象に、アート・ドキュメンテーションの研究を確立する必要がある。アーカイヴという組織に収集し、利用し、保存・蓄積する情報メディアとしての資料特性の研究こそが、まず最初に手を着けられねばならない。資料の特性を研究することにより、資料相互間の秩序付けや関連づけのあり方が明らかになり、それら資料の集積拠点となるアーカイヴの運営のあり方も自ずから明らかになるからである。

すなわち、基本的な資料の研究を基礎として、資料組織化の研究、資料管理組織の運営の研究が求められる。このうち、今年度の研究は資料の研究に焦点が絞られた。

3．アートの種類：対象となる情報メディアとしての資料の範囲

アート・ドキュメンテーションにとって、最も重要な資料はアートの作品そのものである。このアートの作品は、文学作品や美術・造形芸術作品のように、作品自体が記録物として、ある種の情報をメディアの上に固定化させているものもあれば、上演・演奏される作品のように、情報の記録のためには、作品そのものではなく、録音や録画という行為を通じて資料化されるアート領域もある。美術研究のように、オリジナルな作品そのものを研究対象としながら、時にはこれら作品の図録を要するという分野もあれば、音楽の演奏や、演劇の上演のように本来の作品は演奏や上演という再現性がないため、それを補うために、楽譜や脚本を利用したり、録音や録画という技術に依存するアートもある。ところがこのような資料の持つ異質な情報特性はアートの研究そのものを制約し、アートに諸領域を形成する。多様なアートの種類を大まかに分類しても、ディドロとダランベールは文学、音楽、絵画、彫刻、建築、彫版、演劇に区分し[★5]、ベーコンの知識の分類を基礎とする日本十進分類法では文芸に加えて、彫刻、絵画・書道、版画、写真・印刷、工芸、音楽・舞踊、演劇・映画に区分している。このような伝統的なアートの諸領域に加え、新たなアートの領域が不断に生じている。これらの全てがアート・ドキュメンテーションの対象領域である。

4．資料（ドキュメント）とは何か

アート・ドキュメンテーションでの対象とする資料とは、ドキュメンテーションという言葉からも明らかなように、何らかの記号で情報を記録した資料類、すなわちドキュメント（document）である。このドキュメントについては、多くの研究者により定義や概念規定がなされているが、その若干を例示すれば、次のようなものが挙げられる[★6]。

Paul Otlet：図像的に表示されたり、書かれた記録類は理念や対象物の表象であるが、対象物それ自体は観察することにより、情報が得られるならドキュメントと考えられる。(例えば、文献類の他に＝著者註＝）自然の物体、人工物、人間の活動のあとを示す標本（考古学者の発見物等)、模型、教育用ゲーム、芸術作品などがある。

Walter Schurmeyer：研究や比較のために使える我々の知識を拡張するための如何なる物的な基礎もドキュメントである。

Suzanne Briet：自然のもしくは概念上の現象を表し、再編成し、論証することを意図して、保存されたり、記録されたりした物的、表象的な記号（しるし）である。一つのドキュメントは一つの事実を支持する証拠である。

Donker Duivis：ドキュメントは表現された思想の容器である。その結果、中身が精神的特性を持っている。

このようにドキュメントの定義は物理的形式より、ドキュメントの機能に重点が移ってきている。これらの定義が情報技術の進展によるデジタル環境に於いて変化するか否かの問題について、Michael Buckland は「デジタル環境では他の全てのものもそうであるように、従来からのドキュメントもデジタル技術の中に一連のビットの列として物理的に存在する。(このような状況下で）デジタル・ドキュメントの技術を強調することはドキュメントとしてのデジタル・ドキュメントの理解を妨げることになる」★6 としている。

また、ドキュメントの機能について、特に記号論的考察との関連のもとで、アート・ドキュメンテーションの立場からはドキュメントが意味的対象ともなり、美的・芸術的対象ともなることに留意する必要がある。併せて、記号論的なドキュメントの分析と情報技術との関係についてはより深い考察が必要になるが、その問題はJulianWarnerの著作★7 に詳しい。

5．おわりに

アート・ドキュメンテーションについては、日本においても美術関係のドキュメンテーションが一部先行してはいるが、本格的な研究はまだ始まったばかりである。その中で、資料についても、記録の媒体、表現特性、形式等の持つ意味を更に基本に立ち返り本格的に考察することが求められている。

註

☆1――高山正也.ジェネティック・アーカイヴ・エンジン（理論グループ：アート・ドキュメンテーション論の基礎）,創造的ディジタルメディアの基礎と応用に関する研究,慶応義塾大学SFC研究所, 2000, p.384-386〔平成11年度科学研究費補助金（COE形成基礎研究費）研究報告書〕より転載.

☆2——図書館情報学ハンドブック, 丸善, 1988, p. 93

☆3——ジェネティック・アーカイヴ・エンジン, 創造的ディジタルメディアの基礎と応用に関する研究, 慶應義塾大学SFC研究所, 1999, p.279-285（平成10年度科学研究費補助金（COE形成基礎研究費）研究報告書）

☆4——前掲書

☆5——鷲見洋一, 記録・分類・啓蒙＝フランス百科全書をめぐって, レコード・マネジメント, No.31（1996）, p.1-12

☆6——Buckland,Michael,「ドキュメント」とは何か, 高山正也訳, レコード・マネジメント, No.32（1997）, p. 35-42

☆7——Warner, Julian, 本とコンピュータを結ぶ, 高山・柳監訳, 勁草書房, 1999, p.175